イワン・デニソビッチの一日

A．ソルジェニツィン

江川　卓訳

毎日新聞社

訳者略歴

江川　卓（本名　馬場宏）　1927年東京生まれ。東大法卒。ラジオ・プレス勤務。主な訳書はショロホフ「静かなるドン」（角川文庫）エレンブルグ「雪どけ」（修道社）パステルナーク「シュミット大尉」（平凡社）ガガーリン「宇宙への道」（新潮社）など。

イワン・デニソビッチの一日
価　200円
昭和38年3月1日第1刷
昭和38年3月15日第3刷
原著者　A・ソルジェニツィン
訳者　江川卓
発行者　高木金之助
発行所　毎日新聞社
東京都千代田区有楽町1～11
大阪市北区堂島上2～36
北九州市門司区清滝町1～902
名古屋市中村区堀内町4～1
印刷　磯崎印刷株式会社
製本　大口製本株式会社
〈検印省略〉

〈日ソ翻訳出版懇話会へ届出済み〉

イワン・デニソビッチの一日

装本　高木寛

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

午前五時、つねとかわりなく、起床の合図が鳴った。本部建物の横に吊るされたレールを、ハンマーで叩くのだ。きれぎれなその音は、指二本もの厚さに氷の張りつめた窓ガラスにさえぎられ、かすかにしか伝わってこない。それもじきにとだえた。この寒空だ。看守にしたって、そういつまでも鳴らしつづける元気はない。

音はとだえた。が、窓外は、まだ深夜とすこしもかわらない。さきほどシューホフが用便に立ったときと同様、いちめんの闇だ。黄ばんだ常夜灯が三つ、窓に映っている。二つは外庭の、一つは内庭の灯だ。

なぜか、バラックの扉をあけにくる気配がない。日直当番のものが用便桶を棒にとおして、かつぎ出す様子もない。

シューホフは、一度として起床の合図を聞きもらしたことがなかった。いつもその音で目をさました。点呼までの一時間半、それは、公けのものでない自分の時間だ。ラーゲル生活に通じたものにはいつだって内職かせぎのチャンスがある。だれかの古帽子の裏地を、指なし手袋に仕立て直してやってもいい。裕福な班員の寝床へ、乾いたフェルト靴をとどけてやってもいい。積みあげられた靴のまわりで、はだしの足をばたばたやりながら、あれこれ選びだす手間をはぶいてやるわけだ。でなければ、私物保管所をひとまわりしてくるのもいい。こまめに掃除してやったり、なにか持ってきてやったり、サービスのたねはつきない。いっそ、食堂へ行って皿あつめをやるのも手だ。テーブルにほっ

たらかされている皿を山のように抱えて、食器洗い場へ持っていく。なにかにありつけることは、まずまちがいない。しかし、皿集めの希望者はあまりに多すぎ、話にならなかった。なによりも、皿の底になにか残っていた場合、つい誘惑に負けて、皿をなめまわすようになるのがこわかった。シューホフの頭には、彼の最初の班長クジョーミンの言葉が、いまもこびりついて離れない。その班長は、一九四三年までにすでに十二年を勤めあげた、いわばラーゲルの古狼だったが、いつか、森のなかの空地帯で、焚火を前に、戦線から引張ってこられた自班の新入りたちに、こう語ったものだ。

「いいか、みんな。ここの掟は、弱肉強食の密林の掟だ。だがな、ここでも人間は生きられる。ラーゲルでくたばって行くやつは、いいか、皿をねぶりまわすやつ、医務部の方にばかり色目を使うやつ、それから、こそこそ仲間の密告をやるやつらだ」

密告のことは、おそらく、彼のうっ憤ばらしも半分だったろう。やつらは、保身の才にはたけている。ただ彼らは、他人の血を犠牲にして、身の安全をはかる手合いだ。

いつも起床の合図で床を蹴るシューホフだが、きょうは起きだそうとしなかった。きのうからどうもぐあいが思わしくないのだ。悪寒がするというか、身体がだる痛いというか、夜も冷えてならなかった。浅い眠りのあいだ、たえず、すっかり病みついてしまったような、いくらかまた持ち直したような幻覚になやまされどおしだった。朝がおそく来てくれればいいと、そればかり思っていた。

しかし、朝は、そんなことにはおかまいなくやってきた。

ここで暖を取ろうというのが、どだいむりな話だった。窓には氷がこびりつき、四方の壁が天井と接するあたりには、バラックじゅう――ともかく、たいしたバラックだ！――まっ白なくもの巣、いや霜氷が置いているのだから。

シューホフは起きださない。上段の寝床に横たわったまま、毛布と上っ張りを頭からひっかぶり、綿入れ胴着の片袖を裏返しにして、そのなかに両方のくるぶしを突っこんでいる。目は見えなかったが、彼にはもの音で、バラックのなか、彼の班の一隅で起こっていることが、そっくり見当がついていた。廊下を重たげにきしませながら、日直の老人が八ベドロ（約百リットル）入りの用便桶をひとつ、運んでいった。これは廃疾者のやる軽労働とみなされているわけだが、まあ、いちど、中身をこぼさずに持ちだしてみたらいい！　やがて第七五班で、乾燥台から取りだしたフェルト靴を、束にして床に叩きつける音が聞こえた。つぎは、こちらの班。（おれたちの班も、きょうは靴を乾かす順番だっけ）。班長と副班長がだまって靴をはいている。彼らの寝床のきしみ音で、それと知れる。副班長はすぐにパン切り場へ、班長は本部建物の生産計画部へ出かけるはずだ。

いや、おなじ生産計画部の作業割当係のところへ行くといっても、きょうは、いつもとはすこしわけがちがう。シューホフは思いだした。きょう運命がきまるのだ。彼らの第一〇四班が、作業場建設工事から新しい現場《社会主義生活センター》、略称《社生センター》の方へとばされるか、どうか。この《社生センター》というのは、うねうねした雪の山のあいだの、樹一本ない原っぱにほかならなかった。なににせよ、そこで作業をするためには、まず穴を掘り、柱を立て、自分の手で有刺鉄線を張りめぐらすことからはじめなければならない。自分たちが逃げださないための用心である。そうしておいてから、はじめて建設にかかれるのだ。

あそこへやられたら、一ヵ月は身体をあたためる場所もない、と観念するがいい。なにせ掘立小屋ひとつない場所。焚火をしようにも燃やすものがない。暖まりたかったら、一心不乱につるはしを振るしかない、ときている。

班長は、気がかりげな様子で、調整の交渉に出かけて行く。どこか、のろまな別の班に、押しつけてくるしか手はない。もちろん、から手で話がつくわけもない。作業割当主任のところへ塩づけベーコン半キロはさげて行かずばなるまい。いや、ひょっとすると、一キロ。

試すだけなら損はない。医務部へ出かけて、作業の一日免除を申請してみるか？　なにしろ全身がばらばらになりそうな気分だ。

それに、きょうの当直看守はだれだっけ？

そうだ、一・五人力のイワン、やせて背のひょろ長い、黒眼の軍曹だ。ちょっと見はいかにもおっかなそうだが、気心が知れれば、こんな話のわかる当直看守もなかった。営倉にぶちこむこともしないし、規律監督官のところへ引っぱっていくこともしない。九号棟バラックの食事の番がまわってくるまで横になっていても、まずは大丈夫。

階段式寝台がぐらぐら揺れはじめた。いちどに二人が起きたらしい。上段ではとなり同士のバプチスト教徒（物心ついてから洗礼を行なうよう主張するキリスト教の一派）アリョーシカが、下段では、元海軍中佐ブイノフスキーが。

用便桶を二つとも運びだした日直の年寄りたちが、だれが湯を汲みにいくかで口げんかをはじめた。女のように、ねちねちといつまでも口あらそいをつづけている。第二〇班の電気熔接工が一喝した。「やい、灯心野郎！」

そういっておいて彼らのあいだにフェルト靴を投げつけた。「あいこだとよ！」

フェルト靴は柱にぶつかってにぶい音をたてた。口あらそいはやんだ。

となりの班では、副班長がぼそぼそいっている。

「ワシーリ・フョードルイチ！　糧食係のやつら、またごまかしやがって、畜生め！　九百グラムの

パン四本のはずが、三本になっちまった。だれかに、行きわたらない勘定ですぜ」
彼の声は低かったが、すでに班員全体がそれを聞きつけ、いまや固唾をのんでいることにまちがいはなかった。だれかから、夕食の一片がとりあげられるのだ。
シューホフは、おが屑を詰めた自分のマットのうえに、なおも横になっていた。いっそ、どちらか一方にきりがついてくれればいい。悪寒でがたがた震えだすか、だる痛さが消えるか。ところが、そのどちらともつかないのだ。
バプチスト教徒のお祈りがまだ小声につづいているうちに、小用に立ったブイノフスキーが戻ってきた。そして、だれにともなく、そのくせ、いい気味だとでもいわんばかりの調子で、つぶやいた。
「いいか、赤軍水兵諸君、張りきれよ！　三十度は確実ですぞ！」
その声を聞いて、シューホフは決心した。医務部へ行こう。
だが、ちょうどそのとき、だれやらの権柄ずくな手が、彼の身体から胴着と毛布をひっぱいだ。シューホフは、顔にかけていた上っ張りをはねのけ、上体を起こした。その目の下、上段の寝台のあたりまで首をのばして、やせぎすのタターリン（だったん人）が立っていた。
つまり、番外の当直として、彼がこっそり忍んできたわけだ。
「シチャー（III）・八百五十四号！」タターリンは、黒い上っ張りの肩にあてた白いつぎ布の文字を読んだ。「営倉三日間、作業継続！」
ドスの利いた彼のひと癖ある声がひびきわたったとたん、ランプを全部ともしてないので薄暗い感じのバラックのなかは、一時にがたごとしはじめた。ここには五十台の南京虫だらけの階段式寝台に、二百人が眠っていた。まだ起きだしていなかったものたちが、大あわてで着替えをはじめたのだ。

「どういうわけでしょうか？　長官どの」自分の声が、しようと思ったよりずっと哀れっぽくひびくのを感じながら、シューホフはたずねた。

作業継続――おなじ営倉といっても、これはまだ半営倉だった。熱いものももらえる。もの思いにふけっている暇もない。ほんとうの営倉というのは、作業に出されなくなるときだ。

「起床合図で起きなかったろうが？　さ、本部へこい」タターリンはのろくさといって聞かせた。どうして営倉をくったかは彼にもシューホフにも、他のだれにも、とうにわかっていることだからだ。

ひげのないタターリンのくたびれたような顔には、なんの表情も浮かんでいなかった。彼は、第二の獲物をさがそうと、後をふり向いた。だが、薄暗がりにもぐりこんでいたものも、ランプの下にいたものも、上段、下段をとわず、だれももう、左膝に番号の入った黒の綿入れズボンに足を通そうとしているところだった。いや、もう身じまいをすまして、上っ張りの前をかきあわせながら、出口にいそいでいくものもいる。表に出て、タターリンが行ってしまうのを待とうというのだ。

おなじ営倉をくうにしても、もっと別の、身におぼえのある理由からだったら、シューホフもこれほどくやしい思いを味わうことはなかっただろう。なまじ、いつもは先頭をきって起きだしているのにという気があるだけに、腹の虫がどうにもおさまらないのだった。しかし、いまさらタターリンに泣きを入れてみたところで、どうなるものでもない。いちおうの体裁上、くりごとをつづけてはみたが、シューホフはそのあいだにも、綿入れズボンに足をとおし（ズボンの左膝の上のところには、やはり薄汚れたぼろ布が縫いつけられ、その上に、いくらかはげかかった黒の絵具でШ-854（シチヤー）と番号が記されている）、胴着を着こみ（これにはおなじような番号が胸と背にひとつずつ入っている）、床の上に積んであるフェルト靴の山から自分のを選びだし、帽子をかぶり（これにも前の方に番号入りのぼろ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

布がついている)、タターリンについて外へ出ていった。

シューホフが連れ去られていくところは、第一〇四班の全員が目にしていた。が、だれひとり口をひらくものはなかった。へたに何がいえるというのだ？　班長がいれば、すこしは口もきいてもらえたろうが、あいにくと居合わせない。シューホフの方からも、だれに言葉をかけるでもなかった。タタリーンを怒らせるだけの話だ。そっとしておくにかぎる。なに、朝めしは取っておいてくれるだろう。察しのいい連中だから。

二人は外へ出た。

凍寒の戸外には霧がこめ、呼吸がくるしかった。遠い隅の望楼から、二台の大型サーチライトが光を十字に交叉させながら外庭を照らしだしている。外庭にも内庭にも、いたるところ構内灯がともっていた。星の色がすっかり薄れて見えるのは、その数があまりに多いせいだ。

フェルト靴を雪にきしませながら、囚人たちが小走りに駆けまわっている。便所へ行くもの、保管所へ行くもの、小包引渡所へ寄って、個人炊事場へひきわりを持っていくもの。それぞれに自分の用がある。だれも一様に首を肩にすくめ、上っ張りの前をかきあわせている。きょう一日、この凍寒のなかで過さねばならないと思うと、寒さがいっそう身にこたえるのだ。タターリンはしみだらけの空色の襟章のついた古い軍隊外套を着て、悠然と歩いていく。凍寒などものともしないふうだ。

二人は、石造のラーゲル内監獄――ブールを取巻く高い板塀を回り、囚人どもに襲われぬよう有刺鉄線を張りめぐらしてあるパン焼場の横を抜け、本部建物の角をまがった。そこには、霜でまっ白になったレールが、太い針金で柱にくくられている。さらに行くと、もう一本柱があり、やはりいちめんに霜でおおわれた温度計がさがっている。風除けがつけてあるのは、あまり低い温度を示さないよ

うにするためだ。シューホフは乳白色の筒形の温度計の方にちらと横目を使った。もし四十一度を示していれば作業に出されずにすむ。しかし、どう見てもきょうは、四十度まではいっていない。

本部建物に入ると、すぐ看守室に通された。くる道々、うすうす察してはいたことだが、これではっきりした。営倉はおどしだけで、そのかわり看守室の床洗いをさせられるのだ。タターリンからも営倉を免除し、床洗いを命ずると、正式に申しわたされた。

看守室の床洗いは構外作業に出ない特別の囚人の仕事だった。つまり、本部建物の日直の担当ということになっている。ところが、本部建物に長らく住みついて、ラーゲル所長や、規律監督官や、教父（政治保安部員）の個室に自由に出入りし、彼らの用をおおせつかっているうちに、この日直は、ときには看守たちが知らないことまで小耳にはさむようになった。そして、いつからとなく、ひらの看守たちのために床洗いをやるのは自分の柄でない、と思いはじめた。一、二度は呼びつけてもみたが、看守たちもやがてあきらめ、床洗いには作業要員を引きぬいてくるようになった。

看守室には煖炉ががんがん焚かれていた。二人の看守が、垢じみた作業服一枚になって、将棋をさしている。もう一人は、毛皮外套のバンドを締め、フェルト靴をはいたままで、壁ぎわにとりつけられた狭い腰掛けのうえに横になり、眠っている。片隅には桶と雑巾が置かれていた。

シューホフはやれやれとした気持で、タターリンにあらためてわびを入れた。

「長官どの、ありがとうございました！　今後はけっして寝すごしたりいたしません」

ラーゲルの掟は簡単だ。やることをやったら、それでもう文句はない。仕事を与えられると、シューホフは、朝からのだる痛さが吹っとんでしまったような気持になった。彼は素手で桶をさげ（手袋はあわてて枕の下に忘れてきたのだ）、そのまま井戸の方へ向った。

生産計画部に集まってきた班長たちが、何人か柱のまわりにむらがっていた。なかの一人、元ソ連邦英雄（主として軍関係の功労者に与えられるソ連の最高称号）の若々しい感じの男が、柱によじのぼって、温度計を手でこすった。

下からはさかんに声がかかる。

「おい、息をかけるな、あがっちまうからな」

「あがったらおなぐさみ！……びくともするもんじゃねえや」

シューホフの班長チューリンの姿は見えなかった。桶をその場に置き、両手を袖のなかで組んで、シューホフは興味深げにその様子を見守っていた。

柱の上からはしゃがれた声が答えた。

「二十七度半ぴっきり、糞ッ」

もう一度顔を近づけてたしかめ直し、とび降りてきた。

「狂っていやがるのさ、いつだって嘘っ八だァ」だれかがいった。「だれがラーゲルにちゃんとしたやつを掛けとくもんか？」

班長たちは散っていった。シューホフは井戸の方へ駈けだした。結んでいない帽子の耳被いがばたばたして、両耳がちぎれそうに痛む。

井戸の枠組は厚い氷でおおわれ、桶をなかに入れるのがやっとだった。綱も棒のようにこちこちになっている。

感覚のなくなった手に湯気の立つ桶をさげて、シューホフは看守室に戻ってきた。両手を井戸水につけると、ぬくぬくと暖まる。

タターリンはいなかったが、看守の数は四人になっていた。将棋をさしていたものも、眠っていた

ものも加わって、一月のきびの割当はどれくらいだろう、と論じあっている。(ラーゲル付属部落の食糧事情は悪かった。一般部落民とちがって、看守たちには、切符がきれてからも、なにやかや食糧品を値引きで渡していた)。

「ドアをぴっちり閉めやがれ、畜生！　風が入るぞ！」その一人が話をやめて、どなった。

朝のうちからフェルト靴をぬらすのはどうにも割りがあわないことだった。かといって、バラックに走っていったところで、履きかえがあるわけではない。囚人生活八年のあいだに、シューホフは、履きものについては実にさまざまな事態を経験してきた。冬のさなか、フェルト靴なしで歩かされたこともある。編上靴ももらえず、木皮のぞうりに古タイヤの甲当てだけというときもあった。このところ、履きものの方は事情がいくらかましになってきている。去年の十月、シューホフは頑丈な編上靴を手に入れた。私物保管所まで副班長のお供をしていって、せしめたのだ。爪先がしっかりしていて、厚地の巻靴下を二枚まいても大丈夫なくらい、ゆったりしていた。一週間というもの、新品のかかとをたえずこつこつやりながら、いい機嫌だった。十二月になると、フェルト靴も支給になった。ついてやがる、あわてて死ぬこたあない、と悦に入っていた。ところが、経理部のいけすかない野郎が注進に及んだものだ。フェルト靴を支給した以上、防寒靴は取りあげなければいかん、囚人のぶんざいで一度に二足も靴をもっていたりしたんでは、しめしがつかん、というわけだ。そこでシューホフは、二つに一つを選ぶしかなくなった。冬中、編上靴ですごすか、それとも編上靴は返上して雪どけごろになってもフェルト靴でとおすか。油を塗って皮を手入れし、だいじにして、まっさらのようにしておいたのに！　八年のあいだで、この編上靴ほど惜しいと思ったものはなかった。取りあげられた以上、ひと山にしてほっておかれ、春になっても、もう手もとに帰ってくる気づかいはない。

シューホフはようやく決心をきめた。すばやく長靴をぬいで、部屋の隅に置き、巻靴下もおなじ隅へ脱ぎすてた。（さじが、床にあたってカチンと音をたてた。どんなに不意の営倉入りでも、さじだけは忘れたことがない）そして、はだしのまま、雑巾にたっぷりと水をしませ、看守たちのフェルト靴のあたりをめがけて突進した。

「この野郎！　気をつけやがれ！」一人がはっとして、両足を椅子の上にもちあげた。

「米だと？　米は基準が別さ。米といっしょにするやつがあるか！」

「おい、なんだってそんなに水をだぶだぶさせるんだ！　そんな洗い方ってあるか？」

「長官どの！　こうしないと洗えませんです。なにしろ泥がこびりついておって……」

「きさま、女房が床を洗うところを見たことないのか？　ちんころ野郎」

シューホフは、ぼたぼたと水のしたたる雑巾を手にもったまま、身体を起こした。

気のよい微笑に顔をほころばせると欠け歯がのぞく。一九四三年、ウスチ・イジマ（パレンツ海に注ぐペチョラ河畔の部落）の収容所で栄養失調のために死にそこなったとき、欠け落ちたものだ。あのときは赤痢で身体中の水分がくだってしまい、やせ細った胃はなにも受けつけようとしなかった。どこか息もれのするようなしゃべり方が、そのときのなごりに残っている。

「長官どの、女房とは四一年におさらばしたままであります。どんな女だったかも思いだせません」

「こいつらの洗い方はいつもこうなんだ……畜生めら、なにもできやせんし、やる気もないときている。まったくの穀つぶしさ。糞でもくわしときゃ相応のやつらよ」

「だいたい、毎日床洗いをやるばかもないもんだ。じめじめしどおしじゃねえか。おい、八百五十四号！　いいか、そっとこすって、いくらかしめり気がある程度にしとけ。さっさと失せやがれ」

「米、米いうな！　きびと米じゃいっしょにならねえよ！」
シューホフはさっさと床洗いにかかった。
仕事というものは、どうにでもやりようがある。人間のためにやるときは、手を抜くな。馬鹿のためにやるときは、見てくれで行け。
そうでもしなければ、とうにみなくたばっているはずだった。
乾いたところが残らぬように気をくばりながら、シューホフは万遍なく床板をぬらしてまわった。雑巾はしぼり出しもせずに、煖炉のかげにほうり投げた。戸口で自分のフェルト靴をはき、あまった水は、看守たちが通っている表の通路の方へ流しだした。それから風呂場と、なんの煖房もない薄暗いクラブの建物の横の近道を抜けて、食堂へ突っ走った。
まだ医務部にも寄らなければならない。全身がまた痛みだしてきた。それに食堂の前で、看守に出っくわさない用心も要る。単独行動のものは捕えて営倉に入れるべし、と、ラーゲル所長からきついお達しが出ている。
食堂の前に、きょうはめずらしく人だかりがしていなかった。行列もできていない。ずんずんと入っていく。
戸口から吹きこむ冷気とスープの湯気とで、なかは、まっ白く煙っていた。まるで蒸風呂に入ったよう。すでにテーブルについている班もあれば、通路を埋めて、席のあくのを待っている班もあった。各班から二、三人ずつの給仕役が出て、人ごみをかき分けるようにしながら、スープと雑炊（カーシャ）の皿をのせた木製の盆を運んでいる。大声に叫びながら、テーブルのあきを探して歩くが、どのみち耳をかすものはない。やい、木偶（でく）、のろま、こいつ、盆を押しやがったな。こぼすぞ、こぼすぞ！　それ、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.